こがね谷の秘密

木暮正夫・作
渡辺有一・画

こがね谷の秘密

木暮正夫・作　渡辺有一・画

913　こがね谷の秘密
木暮正夫
金の星社　1982
198 P.　20cm
（文学の扉　1）

●こがね谷の秘密

初版発行　一九八二年二月©

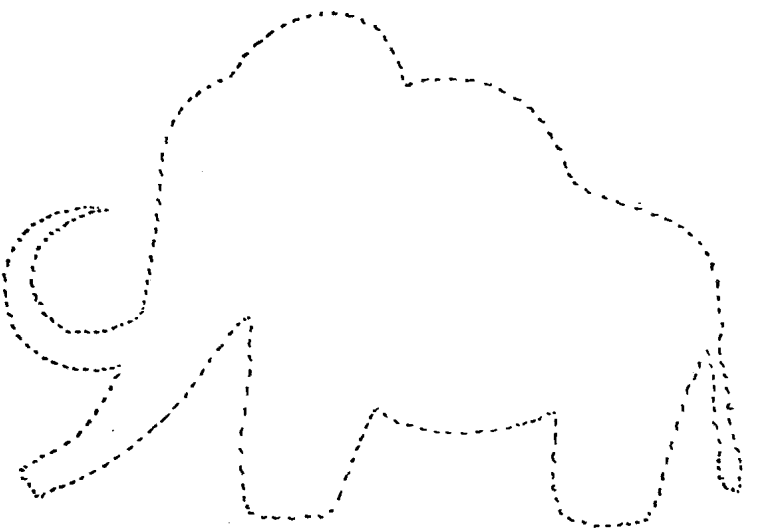
作　者／木暮正夫
画　家／渡辺有一
発行所／株式会社　金の星社
〒111　東京都台東区小島一―四―三
電話・東京（〇三）八六一―一八六一（代表）
振替・東京〇―六四六七八
印刷・製本／ケイ　エム　エス

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

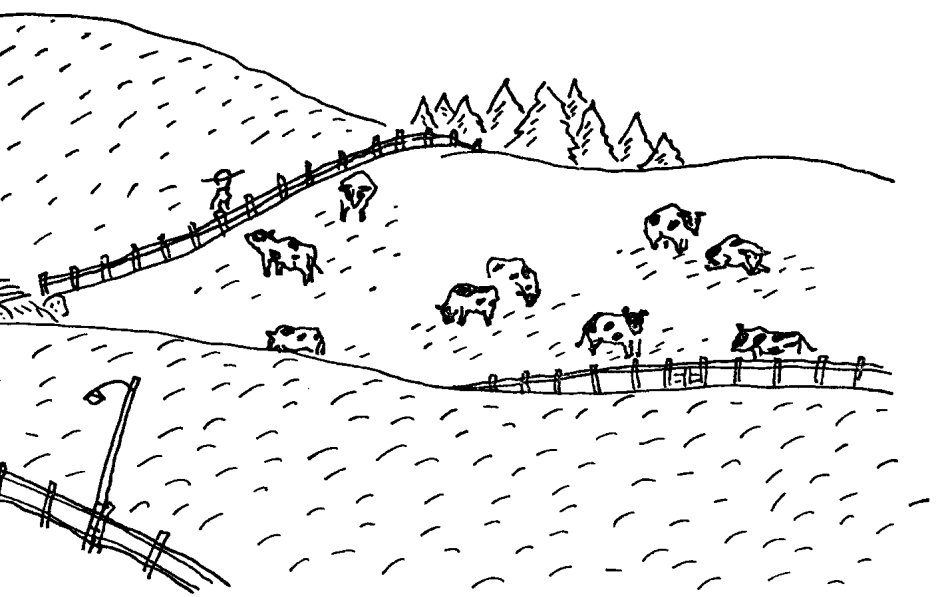
ISBN 4-323-00891-0

もくじ

●こがね谷の秘密●

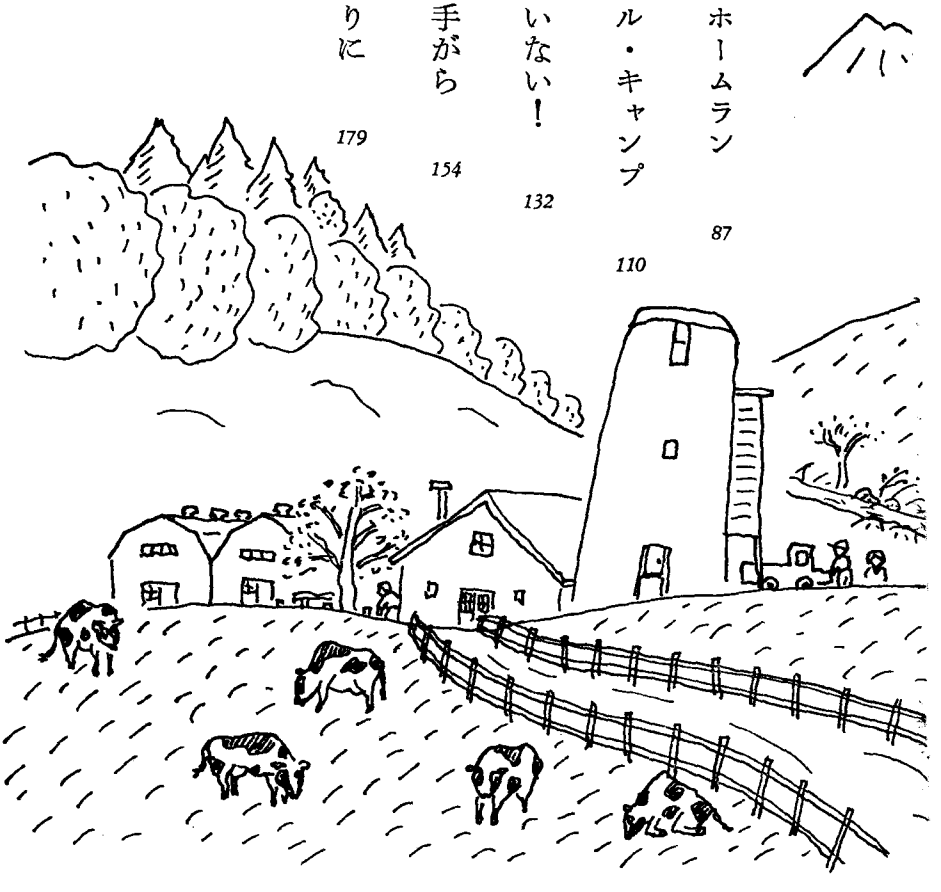


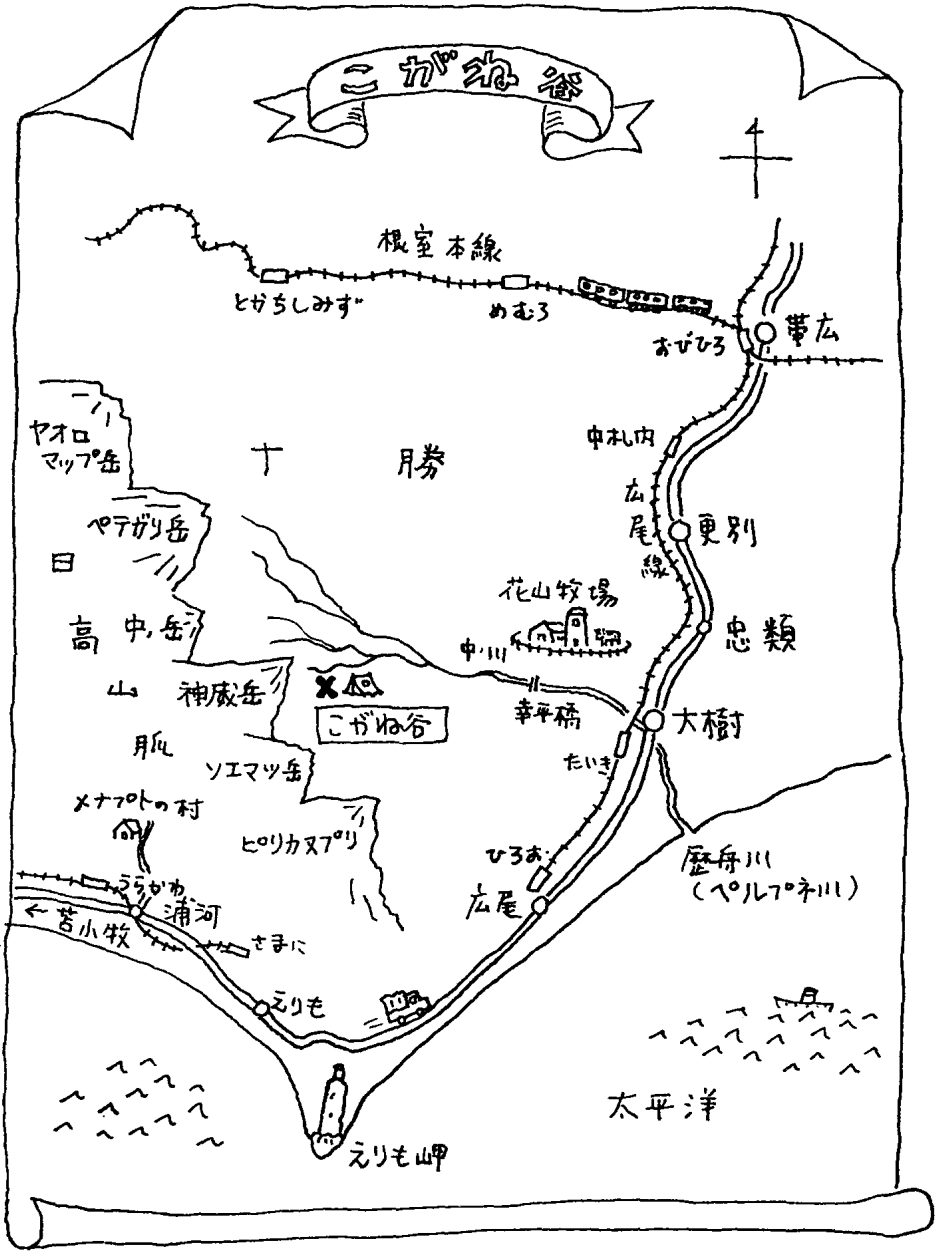
第一章　さらば東京(とうきょう)　7
第二章　かくれていた女の子　19
第三章　牧場(ぼくじょう)まで　31
第四章　あらしの夜　45
第五章　まぼろしのマンモス　64



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六章　えつ子のホームラン　87
第七章　サバイバル・キャンプ　110
第八章　ノボルがいない！　132
第九章　ペルのお手がら　154
第十章　夏のおわりに　179
あとがき　194




こがね谷
根室本線
とかちしみず
めむろ
おびひろ
帯広
中札内
広尾線
更別
十勝
ヤオロマップ岳
ペテガリ岳
日高山脈
中岳
神威岳
ソエマツ岳
メナプトの村
ピリカヌプリ
こがね谷
花山牧場
中川
幸平橋
忠類
大樹
たいき
ひろお
広尾
歴舟川
(ペルルプネイ川)
うらかわ
浦河
苫小牧
さまに
えりも
えりも岬
太平洋

こがね谷(だに)の秘(ひ)密(みつ)

木暮正夫・作
渡辺有一・画

第一章　さらば東京

「どうも、ながいあいだお世話になりました。この花山大太郎、東京ぐらしにわかれをつげ、ただいまこれより、ふるさと北海道に帰りまして、おやじの牧場の仕事を手つだうことにいたしました」

花山さんはいつになくしんみょうな顔で、アパートの人たちに別れのあいさつをのべた。かんげき屋で、なみだもろい花山さんのことである。早くも、大きなひとみがうるんでいた。

花山さんとならんでそのわきに立った別所トシユキは、そのうちに花山さんが、わっとはでに泣きだすのではないかと、気が気でなかった。それでときどき、身長一五九センチの花山さんを、よこ目づかいでちらちら見あげた。

花山さんはいまどきの青年にしては、身長にめぐまれているとはいえなかった。身長の

ぶんを、がっしりした肩はばや、いくぶん太めの腰まわりにとられたかっこうである。五年生にしては足のよくのびているトシユキと、身長のちがいは十センチもなかった。

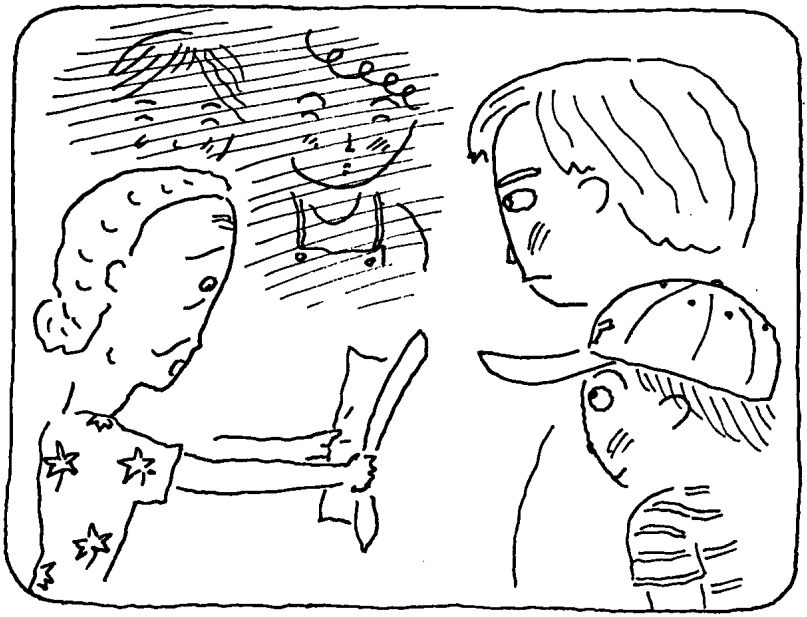
トシユキはこれから、花山さんにくっついて、北海道へいくのである。予定はおよそ三十日間。夏休みならでは、実現させることのむずかしい大計画だった。東京もめったにはなれたことのないトシユキにとって、夏休みのほとんどを北海道の十勝にある花山牧場ですごすこの大計画は、二週間ほど前まで、ただのゆめ物語でしかなかった。

花山さんが、つとめていた商業デザインの会社をやめて、ふるさとに帰る決心をしたのは、七月十日のことである。牧場でウシとウシのけんかをひきとめにはいったお父さんが、角につかれて大けがをしたという電話がとびこんでこなかったら、花山さんは給料が安いとかなんとか言いながらも、あいかわらず商業デザインの仕事をつづけていただろう。

トシユキだって、いつもの夏休みのように、せいぜいプールに通ったり、ゲームセンターをのぞいたりするような、たいくつな毎日をもてあますことになっていただろう。花山さんの思いきった決心のおかげで、ようすがころっとかわったのだった。

花山さんはトシユキを、花山牧場へさそってくれたのである。アパートのへやが、となりどうしのよしみとはいえ、花山さん様さまだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



トシユキの北海道ゆきがきまったのは、夏休みのはじまる五日前である。トシユキは友だちにも、大いに言いふらした。車ごと、大型のフェリーで行くのだ。

七月二十二日の夕がた。

いよいよ、出発がせまっていた。花山さんの前に、みゆきばあちゃんが賞状を手にすすみ出た。

みゆきばあちゃんは、アパートの持ち主で、一号室に住んでいる。六十五歳だというが、気持ちが若いせいか、とてもそんな年には見えない。

「かんしゃ状」

みゆきばあちゃんは賞状をひろげ

て、読みあげ始めた。

「花山大太郎どの。あなたは『みゆき荘』に住むこと三年半。まじめによくへや代をおさめただけでなく、アイロンをつけっぱなしにして外出した八号室の火災を、未然にふせいでくれました。さらには三号室にしのびこんだあきすを、みごとにつかまえたこともありました。よってここに、かんしゃ状と記念品をおくります。――……七月二十二日、みゆき荘、深原みゆき」

見おくりに出てくれていたアパートの人たちは、顔を見あわせて、しのび笑いをもらした。トシユキのお母さんも、くすくす笑っている。が、花山さんもみゆきばあちゃんも大まじめだった。花山さんはあごをひいて、気をつけの姿勢のまま、かんしゃ状の朗読に聞き入っていた。

「ありがとうございます」

花山さんはかしこまって、かんしゃ状と記念品をうけとると、みゆきばあちゃんのさしだした右手を、しっかりにぎりかえした。見おくりの人たちが、手をたたいた。

「がんばるんですよ。からだに気をつけてね」

みゆきばあちゃんの声は、なみだぐんでいた。三年半もひとつ屋根の下にくらせば、お

たがいに別れはつらい。花山さんは目じりをこすった。
「これで、およめさんをみつけて帰れたら、お父さんもよろこばれるでしょうが、花山さんはまだ二十五。いまにきっと、いいおよめさんをもらえますよ」
みゆきばあちゃんがなぐさめた。花山さんにとって、およめさんをつれて帰れないことは、大きな心のこりらしい。
花山さんはアパートの人たちとも、ひとりひとり握手をすると、
「さあ、トシぼう。ぼちぼちいくとすっか」
ようやく、小型トラックに乗りこんだ。トシユキは友だちに、車ごと大型フェリーで北海道へわたるとじまんしたが、花山さんの小型トラックは六万円でおつりのきた中古車である。荷台には、花山さんのへやにあったふとんや本や電気製品などが積んであった。
東京と北海道のトマコマイをむすんでいる日本沿海フェリーの船が、東京湾の有明ふとうをはなれるのは、午後十一時三十分である。
アパート『みゆき荘』は、埼玉県といっても東京の西のはしのベッドタウン、狭山市にあった。狭山は昔から茶どころで、茶畑の向こうに、秩父の山やまが連なっている。西武池袋線の狭山駅にほど近いアパートから有明ふとうまでは、車の混雑ぐあいによって二時

間くらいかかるし、一時間前に乗船の手つづきなども、すませなければならない。
なのに花山さんは、時間を気にしながらも、あたりを見まわしたりして、おちつかなかった。なぜか、そわそわしている。
「だいじょぶなの、時間？」
助手席のトシユキが聞いた。もし乗りおくれたりしたら、まる一日、ふとうで待ちぼうけをくわされてしまう。トシユキは気が気でなかった。
「まかせておけって。ゆとりはみてあるんだ。乗船の予約もとってあることだしな。八時に出てもまにあう」
八時までには、四十分ほどあった。
「でも、とちゅうでトラブルがあると、まずいんじゃないの。パンクするとか、エンジンの調子が、きゅうにへんてこになるとかさ」
「えんぎでもないことを、言ってほしくないなあ。なにしろ、ポンコツの一歩手前の車なんだから。こういう車に乗るひけつは、故しょうのうわさなんかしないで、運を天にまかせて、無心にハンドルをにぎること。これこそまさに、運テンというわけよ」
花山さんはしゃれをとばして、スイッチにさしこんだキイをまわした。ところが、エン

ジンはたくましいひびきを立ててくれなかった。セル・モーターがかろうじて、クゥク、クゥ……、ククゥクゥ、……とまわっただけで、その音もしだいに弱まってしまった。

「いやあ、こいつはまいったなあ。バッテリーがあがっちゃったらしい。きのうは調子よかったのに、なんたることだ」

バッテリーは車の電池で、古くなると機能がおとろえる。

「どうするの、花山さん」

トシユキは心配になった。出発からつまずいているようでは、先が思いやられる。

「トシぼうが、えんぎでもないことをいったからだぞ。しかし、方法がないわけじゃない。ほかの車をよびとめて、バッテリーをつないでかければいいんだ」

花山さんが車をおりると、おもて通りのほうから、七号室の中里さち子さんが、走ってきた。

「もう、間にあわないかと思った。あーっ、よかった！」

さち子さんは大きく息をはずませながら、花山さんにかけよってきた。さち子さんの手には、花たばとデパートの紙ぶくろがあった。

「はい、花山さんに花たば」

「これはどうも……」

花山さんはどぎまぎしながら、花たばをもらうと、助手席のトシユキにあずけた。アパートの人たちが見まもっていたから、照れくさかったのだろう。

「トシユキくんには、野鳥の観察用望遠鏡。べつになにを見てもかまわないけど、倍率は二十倍。おせんべつにあげる」

さち子さんはデパートの紙ぶくろを、トシユキに手わたした。紙ぶくろはずっしり重かった。

「えっ、ぼくに?」

「牧場の手つだいだけじゃ、たいくつして、ホームシックにかかるといけないからよ。牧場のまわりにはたくさんの野鳥がいるし、キタキツネなんかもときどきあらわれるそうじゃない。これがあれば、ばっちり見えるわ」

「でも、安くないんだろ。わるいなあ」

「そのかわり、おみやげをたのしみにしてるわ。そのままネックレスにつけられるくらいの大つぶの砂金をとってきてよね」

さち子さんは花山さんから、牧場のようすや、牧場の西に砂金のとれる川があることを

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com